

【研究ノート】デフリンピックの選手像—報道分析

小倉和夫

2025年に、東京においてデフリンピック大会が行われることにも鑑み、近年開催されたデフリンピック大会（2017年トルコのサムソン、2021年ブラジルのカシアスドスル両大会）に出場した日本選手についての新聞報道（朝日、毎日、読売の地方版も含めた関連記事および写真）を網羅的に分析し、そこから浮かび上がる選手像（選手についての報道の動向）を次の項目別に取りまとめた。すなわち、障害の原因、日常生活上の困難、練習環境などの困難、健常者の選手との関係、競技におけるプレイのやり方やテクニック、知名度およびそれに関連する事柄、選手の自己意識ないしアイデンティティ、選手やコーチなどの競技者と報道関係者とのコミュニケーションの態様などである。

1. 障害の原因と態様

パラスポーツの選手報道においては、通常、障害の原因、程度、ならびにいつから障害を持つにいたったかという3点が問われる。

デフリンピック選手報道についても、よくみると、この3点が意識されている場合が多い。しかし、ケースによっては、いつから障害があったかについては明確でない報道もあり、また、全く聞こえないのか、難聴ではあるが補聴器をつけて補完しうる状態なのかなどについて明確ではない報道も少なくない。さらに、稀ではあるが、特定の選手のかかなり長い紹介記事でも、障害の態様について全く言及のないものもある。たとえば、バレーボールの宇賀耶早紀選手のことを報じた、2017年12月9日付『読売新聞』朝刊記事は、記事の表題で「聴覚障害者バレーボール女子」と題してはいるが、記事そのものの中では、同人の障害の程度や態様については一切触れていない。

以下、典型的ケースとも言える記事についてのその報道態様をみると次の通りである。

表1 デフリンピック大会出場選手の障害の程度と態様

競技	氏名	障害の程度と態様
水泳	茨 隆太郎	先天性感音性難聴 ¹ 。しかし、同じ新聞（読売）の、同じ選手の紹介記事では、単に「生まれたときから難聴」といった表現で紹介されている記事もある ² 。
バレーボール	尾塚 愛実	生後7ヶ月の検査で、感音性難聴との診断 ³
バドミントン	柿内 康平	幼い頃からほとんど聞こえない ⁴ 。
水泳	金持 義和	幼い頃の病気が原因で小学一年生から耳が聞こえなくなった ⁵ 、なお病名を髄膜炎と明記した記事もある ⁶ 。
水泳	齋藤 京香	3才のとき両耳が先天性の中程度の難聴と分かる ⁷ 。
陸上	佐々木 琢磨	幼い頃、内耳性難聴になる ⁸ 。なお、「1才のとき」と時期を明示した記事もある ⁹ 。
陸上	設楽 明寿	生まれつき耳が聞こえない ¹⁰ 。
水泳	津田 悠太	大声が聞き取れない重度難聴 ¹¹ 、原因や障害発生の時期については言及なし。
バドミントン	長原 菜奈美	生まれつき聴覚に障害 ¹² 。
自転車	早瀬 久美	生まれつき聞こえない ¹³ 。
水泳	藤原 慧	幼いころ風疹などで高熱を出しその後遺症で耳が不自由になる ¹⁴ 。1才の時と時期は明示してあるが、病名については言及のない記事もある ¹⁵ 。
卓球	山田 萌心	生まれつき難聴 ¹⁶ 。
陸上	湯上 剛輝	先天性聴覚障害 ¹⁷ 。

これらのケースにあるように、デフリンピック大会に出場する選手たちは、ほとんど、先天性かあるいは幼児時代の病が原因で聴覚障害者となっており、成人あるいは少年少女時代になってから障害を受けたのではない。言い換えれば、健聴者としての体験がほとんどない者と言える。したがって、自己のアイデンティティの一つとして、「聴覚障害者である」という点は、極めて自然であり、強いといえよう。また、先天性あるいは幼い時期の病が障害の原因である場合がほとんどであることは、障害の原因に、戦争、産業災害、自然災害、交通事故といった、社会性を帯びた事情がからんでいないことを意味しており、この点、パラリンピックに出場する選手と境遇の違いがみてとれる。

他方、多くの聴覚障害の選手は、普段の生活では補聴器を使用しているケースも少なくなく、補聴器を外すことが要求されるデフリンピック競技は、ある意味では、特別のルールを決めた新しいスポーツであるともいえる。このことは、後述するように、デフリンピック出場選手の中でも、かなりの選手は、健常者の競技大会への出場を目指して

いることとも関連しているといえよう。

2. 日常生活上の困難

デフリンピック選手についての報道には、時として、聴覚障害者として、日常生活上、どのような困難を体験しているかについて言及しているものがある。とりわけ、健常者とのコミュニケーションの困難について触れたものも散見される。たとえば、陸上の山田真樹選手は、大学時代、当初は「補聴器をつけても多人数だと話が聞きとれなかった。周りが笑うと、その理由がわからず、自分もぎごちない笑顔を作った。パントマイムで習った全身表現や手話で思いを伝えるようにした」と述べている（『朝日新聞』2017年7月30日朝刊）。同じような体験は、水泳の茨隆太郎選手によっても言及されており、相手の口の動きを読む「口話」も多人数になると通用せず、「わかったふりをして数々のトラブルを起こした」という（『朝日新聞』2017年7月27日夕刊）。

また、健常者と一緒に練習や競技を行うと、「スタートのピストルの音が聞こえないため、他の選手の反応を感じてカバーするなどの苦労がある」という者もいる（『読売新聞』2017年7月13日夕刊）。

加えて、元来、耳は聴覚だけでなく平衡感覚を司るため、陸上の佐々木琢磨選手は、コーチに「走る際に体のバランスがとれていない」と指摘されたという（『朝日新聞』2019年2月15日宮城朝刊）。同様に、ハードルの高田裕士選手は、コーチから「ハードルを飛ぶまでの走るリズムが大事」と指摘されたが、これも聴覚に障害のある選手の多くは、リズム感を習得するのが苦手なせいであるといわれる（『朝日新聞』2017年7月16日朝刊）。このため、五輪に出場しようとしても、聴覚障害者は、音の問題に加えて、「平衡感覚を司る三半規管にも障害のある選手が多い」ことからくる困難があると言われる（『毎日新聞』2020年11月24日夕刊）。

そもそも、聴覚障害を理由に、学校で運動部に入れてもらえなかったケースや（注1）、職業資格が聴覚障害者には閉ざされていたケース（その後開放された）もある（注2）。こうした事情もあって、選手生活と就業の両立は、聴覚障害者にとって困難を伴うことも稀ではなく、水泳の藤原慧選手も、こうした苦悩を述べている（『読売新聞』2022年5月4日）。

他方、デフリンピック大会に出場する選手たちは、大会では日常生活とはまた違った次元の世界で競技しなければならないので、その落差に戸惑う点にも注意を払う必要があろう。

たとえば、水泳の齋藤京香選手は、普段は補聴器をつけて生活しているだけに、初め

は、「補聴器を外さねばならない水中は怖かった」と述懐している（『読売新聞』2018年3月15日山形朝刊）。また、女子バレーボールの平岡早百合選手は、普段の練習では補聴器をつけて行っているが、デフリンピック大会では、初めは「音のない状態が怖くて、聞こえないのに聞き取ろうと集中しすぎて頭が痛くなった」と述べており（『朝日新聞』2017年7月29日朝刊、『朝日新聞』2017年8月8日埼玉朝刊）、一部の難聴者で補聴器を常用している選手にとって、デフリンピックは、日常と違う世界として特別の心理的負担を与えるものであることが示唆されている。

他方、日常生活上では、とかく「聞こえないこと」は、障害でありハンディキャップと考えられがちであるが、デフリンピックでは、そうともいえないという思いを抱いた選手もいる。たとえば、陸上のリレー競技で金メダルを獲得したチームの一員である佐々木琢磨選手は、練習では、耳が聞こえないだけに、バトンパスの合図を声や足音を頼りに行えないため、歩測と影をたよりに練習したが、健常者の五輪大会でも、音による合図は声援にかき消されて聞こえなかったと知り、「僕たちにもできると思った」と述べている（『朝日新聞』2017年7月31日朝刊）。このことは、「聞こえないこと」が常にハンディキャップとなるわけではないことをあらためて認識せしめたという点で、デフリンピック大会の環境と日常生活との間に違いがあることを示しているともいえよう。また、デフサッカーの東海林直広選手は、デフリンピックでは、普段から身振り手振りでのコミュニケーションに慣れている聴覚障害者は、「言葉が分からない外国人にも、自分たちだからこそ伝えられることがある」という思いを強くしたという（『朝日新聞』2018年12月15日夕刊）。ここでも、日常生活上のハンディキャップが、デフリンピックでは逆にある種の利点に近いものとなっていることが暗示されている。

3. 健聴者との練習、試合をめぐる問題

聴覚障害者のスポーツ活動、とりわけ、選手のスポーツ活動においては、時として、健聴者に混じっての練習や試合が、大きな意味をもつ場合があるが、そこでは、同時に、若干の困難が指摘されている。たとえば、水泳の藤原慧選手は、高校時代に全国大会において1500メートル自由形競泳で5位に入る活躍を示しているが、「スタートもピストルの音が聞こえないため、他の選手の反応を感じてカバーするなどの苦労がある」という（『読売新聞』2017年7月13日夕刊）（注3）。

また、ハンマー投げなどでは、重心を常にハンマーより前に置くことで遠心力を働かせるが、健聴者は、刻々と変化するハンマーの位置を耳も含め五感に頼って確認するが、聴覚障害者はとかく視覚に頼りすぎ、ずれが生じやすいという困難があるともいわれる

(『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊)。

なお、自転車の早瀬久美選手は、パラリンピックの自転車競技にボランティアとして参加するなどの体験を通じ、聴覚障害者特有の困難として、次のような点を指摘している。すなわち「自転車競技ではギアチェンジやペダルを踏み込む際の音、背後から迫る選手の息づかいなどを、健常者のトップ選手たちは駆け引きの判断材料としているので、聴覚障害者の不利も大きい」という(『読売新聞』2021年9月5日朝刊)。

こうした「困難」を克服して健聴者と同じ土俵で、練習し試合することは、実は、精神的に障害を克服するという象徴的意味があるともいえる。このことを、藤原慧選手は、次のような言葉で表現している。すなわち「障害を持っていてもやれる、ということを証明するために健聴者の中でやってきた」と(『読売新聞』2017年7月13日夕刊, 『読売新聞』2017年7月22日朝刊, 『毎日新聞』2017年12月8日大阪朝刊)。また、そうした「克服」の過程を、次のような趣旨の体験談として語っているハンマー投げ選手もいる。すなわち「甲子園を目指して健常者が通う学校を受験したが失敗し、失意の中でろうあ学校へ進学、そこでハンマー投げをすすめられ、五輪選手の室伏氏から手話をまじえて指導をうけて意欲を増した」と(『毎日新聞』2013年3月25日滋賀)。

他方、こうした「克服」のシンボルとしての意義を、選手たちがデフリンピック大会出場から常を感じ取るとは限らない。むしろ、同じ聴覚障害者としてのアイデンティティを強め、障害を克服することもさることながら、障害を素直に受け止め、それを自らの特性と考える機会がデフリンピックにあるという見方もある。たとえば、前述の藤原慧選手は、デフリンピックへの参加の印象を次のように語っている。すなわち「ボクはこれまで聞こえなくとも健聴者と一緒にやれることを証明したくてやってきたが、この世界(聾啞者だけの大会)もいいものだと思った」(『読売新聞』2017年7月26日朝刊)。ここには聴覚障害者自身のアイデンティティにまつわる微妙な問題が暗示されているともいえよう。

4. 競技場での特有の困難とその克服

障害者スポーツのみならず、多くのスポーツ報道においては、勝利の原因や、選手の作戦などについての論評が多い。聴覚障害者の競技活動、とりわけデフリンピックの如く高度の競技性を有する大会においては、各種の競技活動の上で、聴覚障害がどのような困難を惹起し、それに競技者がどのように対処しているか(ピストルに代わるスタート方法や、笛に代わる旗の使用といった審判や競技ルールに関連するコミュニケーションの問題を越えて、競技そのものの能力、技能の発揮のための工夫如何)については、十

分な説明や報道が行われているとは言い難い。

競技場での特有の困難とその克服に関する数少ない報道の中には次のような例がある。

女子バレーボールについて、聴覚障害があるだけに、構えと視線が一層重視されるとの指摘がある（『読売新聞』2017年3月31日神奈川朝刊）。

また、陸上競技のリレーにおいて、前の走者の影を見ながらバトンパスの仕方を工夫した、あるいは、前の走者がどこまで来たら次が走り出すか、チームでは、各走者が走り出す地点から逆方向にシューズ一足分ずつ距離を測る「歩測」で決めるといった工夫がされているという論評もある（『朝日新聞』2017年7月31日朝刊）。

また、ハンマー投げの森本選手は、五輪選手の室伏氏のやり方を学ぶため、室伏選手の映像を作成してもらい、スピーカーに手を触れて振動によってリズム感覚をつかむ練習をしたという（『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊）。

いずれにしても、こうした聴覚障害者特有のプレイの工夫や練習方法についての解説は、いまだ十分とは言い難く、聴覚障害者のスポーツ大会の「魅力」の発信には、こうした点の考慮もさらに必要と思われる。

この点に関連して、マスコミの報道ではないが、日本デフゴルフ協会が、聴覚障害者にとってのハンディを次のように列挙していることは、他の競技団体にとっても、競技場での困難、ひいてはその克服についての説明をする上で参考となろう（NPO 法人日本デフゴルフ協会ホームページ、<https://jdga.or.jp/about/mission>）。

ゴルフをするときのハンディは大概、次の通りです。

1. 風の音が聞こえない
2. スイング、ショットの音が聞こえない（ショットの音が8種類あると聞いたが、分からない）
3. 林、池に当たった音も聞こえない
4. 同伴者が健常者の場合、コミュニケーションがうまくとれないことがある
5. ゴルフ場からのお知らせなどのマイクが聞こえないために健常者より気が付くのがかなり遅い
6. 回りの雑音も聞こえない
7. グリーンの上でパターを打つとき、音でなく手で感覚を頼りにするため、グリーンの速さはどの位あるか掴みにくい

5. 知名度の問題

選手、関係者を問わず、デフリンピックについて、ほぼ例外なく言われる論議あるいは訴えは、知名度が低いという点である。

こうした知名度の低さにどう対処すべきかについては、選手自身によって各自の意見が述べられている。

なんとといっても、情報発信が大事であるというもっともな意見もある（注4）。さらにそうした「情報発信」の具体策として、陸上の佐々木琢磨選手は、デフスポーツを広めてゆくことが自分の使命であるとして、講演や陸上教室などに従事している（『読売新聞』2023年8月2日夕刊、『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊）。

しかし、選手によっては、何よりも成果を出し、立派な記録を残し、できればメダルを獲得することが、知名度をあげる最大の要因だと見る者もある（『読売新聞』2022年8月13日岩手朝刊、『読売新聞』2016年6月11日朝刊、『朝日新聞』2018年1月24日兵庫朝刊、『朝日新聞』2021年11月12日青森朝刊）。また、競技の魅力を伝える努力が必要という見方を強調する関係者もある（『朝日新聞』2019年2月18日神奈川朝刊）。

知名度向上との関連では、通常、より知名度の高い健常者と混じって試合に出場することが、聴覚障害のある選手の知名度向上にも役立つと見る選手も存在する（『読売新聞』2022年5月4日朝刊）。

加えて県や市町村レベルでの褒賞が、選手の知名度、ひいてはデフリンピックの知名度を高めるために役立つことは言うまでもなく、また、聴覚障害者関連団体が主催する講演、選手によるトークショー、グッズ販売などを組み合わせたイベントが、知名度向上に役立つといえよう（注5）。

他方、デフリンピックについての知名度向上が叫ばれる一つの背景として、近年パラリンピックの認知度が上がっているのに対して、同じ障害者スポーツ大会であるにもかかわらず、デフリンピックの認知度が低いことについてこれを遺憾とする感情が高まっていることにも注意を要しよう（『読売新聞』2022年4月27日朝刊、『読売新聞』2016年6月11日朝刊）。

しかしながら、このデフリンピックの知名度の問題は、情報発信、普及活動、PRといった通常の啓発活動において、聴覚障害者自身の発信には限界があることと関連している。すなわち、多数の人々を相手にしての普及、宣伝活動は、コミュニケーションの問題に直面する。手話、口話、筆談といった手法は、多数の健聴者が相手の場合、十分なコミュニケーションに困難をとまなう場合が少なくないからである。したがって、何

のために知名度を上げるのかという点について、明確な理念が、他のパラスポーツ以上に必要となる。

最終的には、聴覚障害者への社会の理解を深めることが、デフリンピックの知名度を上げる真の動機であるとするれば、スポーツそのものの普及宣伝に先だって、社会的コミュニケーションの円滑化への努力こそが、まず求められねばならないとも考えられよう。すなわち、たとえば、健聴者の方での手話言語の普及活動といったことが同時に行われることがデフリンピックの知名度向上に必要といえよう。

6. 報道関係者などとのコミュニケーションの仕方の問題

知名度向上の問題と関連して、そもそも、報道関係者とデフリンピック選手との間のコミュニケーションの態様がどうなっているかの問題がある。それがスムーズに行われなければ、そもそも、デフリンピックについての、深く、広い報道は行われないこととなりかねないからである。

この点に関連して、デフリンピックについての報道において、そもそも、報道する側の記者と、発信する側の選手と間のコミュニケーションがどのように行われたかということ自体について、報道されているかどうかの問題がある。

多くのインタビュー記事においてはこの点についてまったく言及がないが、中には、言及のある報道も存在する（選手と地方自治体の長などとの面会についての記事や、学校での生徒と選手との交流についての記事などでは、多くの場合、「手話で」とか「手話通訳を通じて」といった、コミュニケーションの方法自体についての記述がある場合が少なくない）（『朝日新聞』2017年6月23日鳥取朝刊、『読売新聞』2017年7月14日群馬朝刊、『読売新聞』2017年9月5日朝刊）。

選手個人への報道関係者の個別インタビューにおけるコミュニケーションの仕方についての具体例としては、朝日新聞石田貴子記者の三枝浩基選手（陸上）へのインタビューで「ノートとパソコンを使った筆談で取材」といった記述がある（『朝日新聞』2019年1月24日兵庫朝刊）。また、おなじく朝日新聞三嶋伸一記者の設楽明寿選手についての記事で、「手話通訳を通じて」という記述がある（『朝日新聞』2017年7月14日茨城朝刊）。しかし、そうした記述は比較的稀であり、選手からの情報入手およびその深さ、広さについて困難があるのではないか、という点についての記述はいたって少ないことがみてとれる。

他方、デフリンピック大会自体についての報道で、デフリンピックならではの点などがどこまで報道されているかについてみると、たとえば、君が代の斉唱が、手話で行わ

れたこと（『朝日新聞』2017年7月29日夕刊）、開会式の演出で、大きなスクリーンに手話通訳が映し出されたことなどの記述がみられるが（『読売新聞』2017年7月20日朝刊）、コミュニケーション問題に焦点を絞った解説はほとんどなく、今後の課題の一つであろう。

7. 選手の意識とその変容

デフリンピック大会出場、ないしそれを目標としている選手たちの意識については、何と言っても、同じ障害を持つ者を鼓舞したい、勇気を与えたい、夢を持たせたいといった思いが強い（注6）。こうした意識は、言い換えれば、自分の努力で障害を乗り越えられること示したいという思いであるとも見なすことができ、その意味では、障害の克服を身をもって示したいという意識とつながっていると見えよう（注7）。

しかしながら、デフリンピックという国際大会への参加、出場体験は、こうした選手の意識に微妙な変化を与えている兆候がみられる。

第一に、日常的なスポーツ活動においては、とかく、戦うこと、障害を克服するという意識が先立ちやすいのに対して、非日常的体験であるデフリンピック出場にあたっては、むしろ、「楽しみたい」という意識が強く出るケースもみられる（注8）。

このことは、デフリンピックは、常に競争相手が同じ聴覚障害者であり、また、大会の運営も同じ障害者が主体となっており、いわば、聴覚障害が一般化、日常化した世界であり、多くの選手が「聴覚障害を隠そうとせず、逆にみせにきているようなオープンな姿勢」（藤原慧選手の発言、『読売新聞』2017年7月26日朝刊）であるという雰囲気の影響しているともいえよう。こうした意識が強まると、障害は障害というよりも一つの個性であるという見方につながることもあり得る。この点に関して、自転車の早瀬久美選手は、「私は耳が聞こえないけれど、一人一人は違うことが当たり前だと受け止めています」と述べている（『読売新聞』2020年9月29日朝刊）。

加えて、デフリンピックでは、選手が国の代表として出場していることからくる意識の転換もある。すなわち、ここでは、選手は障害者ではなく、あくまで国の代表であるという意識を持つようになる（注9）。いいかえれば、ここでは、選手は障害者ではなくあくまで日本を代表するスポーツ選手となるのであった。

ここには、一つの逆説が存在する。すなわち、障害者が障害を克服し世界的大会に出場すると、選手はある意味で、一般の「障害者」から離れた存在になっていくおそれがあるということである。ただ、パラリンピック大会と若干異なり、デフリンピック大会は、聴覚障害者のアイデンティティを強化する行事でもあることから、選手の意識の

「変容」は、機微な要素を含むものといえよう。

注

- (1) 卓球の船越京子選手は、中学のとき、バスケットボール部に入れなかったという。『朝日新聞』2004年12月11日朝刊。
- (2) 薬剤師の資格についての自転車の早瀬久美選手のケースがある。『朝日新聞』2022年6月9日夕刊。
- (3) 同様の指摘は競泳の金持義和選手によってもなされている。『読売新聞』2017年7月4日朝刊。
- (4) 例えば、サムソン大会の日本選手団長であった山根昭治氏の発言。『読売新聞』2017年8月1日朝刊。
- (5) 具体例としては、東京で開催されたもの（『読売新聞』2022年3月27日朝刊）、横浜で開催されたもの（『読売新聞』2019年2月20日神奈川朝刊）などが報道されている。
- (6) たとえば、バレーボールの尾塚愛実選手（『読売新聞』2017年7月14日鹿児島朝刊、『読売新聞』2022年5月3日鹿児島）、水泳の金持義和選手（『読売新聞』2017年7月4日朝刊）など。
- (7) この点について、陸上競技の佐々木琢磨選手は、「自分が努力すれば障害の有無にかかわらず戦える」ことを示したいという表現で述べている（『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊）。
- (8) たとえば、水泳の藤原慧選手は、デフリンピック大会への出場体験について「レースを楽しむ出場者を見て、まずは楽しむことが大事だと思って泳いだ」と述べている（『朝日新聞』2017年8月7日島根朝刊）。
- (9) この点について早瀬久美選手は「耳の聞こえない人の代表ではなく、国民の代表としてがんばりたい」と表現している（『読売新聞』2017年6月29日朝刊）。

表1の注

- 1 『読売新聞』2020年1月22日神奈川朝刊、『朝日新聞』2022年7月26日神奈川朝刊、『毎日新聞』2022年9月13日朝刊。
- 2 『読売新聞』2022年4月27日朝刊。
- 3 『読売新聞』2017年7月14日朝刊。ほぼ同じ内容の記事としては2017年8月26日『読売新聞』鹿児島朝刊がある。後者では「生まれて間もなくの診断で」とされている。
- 4 『読売新聞』2023年8月4日鹿児島朝刊。
- 5 『読売新聞』2023年8月2日佐賀朝刊。
- 6 『朝日新聞』2019年11月1日佐賀朝刊。
- 7 『読売新聞』2018年3月15日山形朝刊。
- 8 『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊。
- 9 『朝日新聞』2022年5月26日青森朝刊。
- 10 『朝日新聞』2017年7月14日茨城朝刊。
- 11 『毎日新聞』2018年1月6日静岡朝刊。
- 12 『朝日新聞』2017年11月28日北海道朝刊。
- 13 『朝日新聞』2021年9月2日東京夕刊。
- 14 『読売新聞』2017年7月22日朝刊。ほぼ同じ内容の記事（生後間もなく病にかかり難聴）は、『毎日新聞』2019年10月12日東京夕刊。
- 15 『朝日新聞』2017年7月26日東京夕刊。
- 16 『読売新聞』2022年7月20日島根朝刊。
- 17 『毎日新聞』オンライン版2018年8月30日、<<https://mainichi.jp/articles/20180830/k00/00e/050/260000c>>。他方、『朝日新聞』2018年6月25日朝刊では、生まれつき両耳がほぼ聞こ

【研究ノート】デフリンピックの選手像—報道分析

えず、小学生のとき人口内耳をうめこむ手術を受けたが、今でも左側に補聴器をつけているとされている。

【Research Note】 Image of Deaflympic Athletes: Analysis of Press Coverage

OGOURA Kazuo

This research note will analyze to what extent and with what content major Japanese newspapers reported on Japanese athletes who participated in recent Deaflympics, from the following perspectives; (1) the degree and condition of the athletes' hearing impairment, (2) the degree and manner in which the athletes experience difficulties in their daily lives due to their hearing impairment, (3) the difficulties athletes with hearing impairment experience when training and competing with hearing people, (4) the ingenuity and skill with which the athletes overcome difficulties they experience in sports due to their hearing impairment, (5) the amount of public visibility of the athletes and the athletes' views on their visibility, (6) how the athletes and members of the media communicate with each other, and (7) changes in the athletes' awareness that occurred as a result of their participation in the Deaflympics.